



私
の
英
雄

著 / 星見月夜



玄関の鍵を開けて、無言で家の中へ入る。わざと足音を立てて階段を上がって、二階へ。廊下を進んで突き当たりの部屋。この扉の向こうが、アイツの部屋だ。

大きく息を吸ってから——強引に、力いっぱい、憎しみを込めて、引き戸を開けた。

「起きろバカ！」

私の大声に、ベッドで寝転んでいたアイツがもぞもぞと動く。動いたけれど、起きるつもりは一切ないみたいだ。いつものことながら腹が立つ。

ずかずかと部屋を進んで、窓辺に。勢い良くカーテンを開けると、外はもう夕暮れの朱色に染まっていた。まばらな家々と、そこかしこに立ち並ぶ木々。この町のどこにでもある風景。

澱んだ匂いと滞った空気を入れ替えるために、窓を目いっぱい開ける。やっと涼しさが感じられる季節になってきた。そろそろ朝晩は毛布が必要になるだろう。そうなれば、すぐに木々は葉を落とし、長い冬が訪れる。

視線を部屋の外から、中へと戻す。薄暗い、散らかった、埃臭い部屋。埃の匂いだけじゃない。汗やら何やら分からない匂いの充滿した、男の人の部屋。溜め息を吐くために息を吸うのですら鬱陶しい。

「さっさと起きて、少しは部屋片付けなさいよ！」

ベッドの縁を、苛立ちを込めて蹴り飛ばす。ゆっくり十数えるくらいの間があつて、やっとアイツが――高志が、顔を上げた。

無精ひげも髪の毛も伸び放題。寝癖で酷いことになっている前髪をやる気なくかき上げて、高志が言った。

「千代か」

かすれたような、寝起きの声。意味のない、名前を呼ぶだけの、確認するだけの言葉。

「私以外に誰がアンタの面倒見てくれるつてのよ！ 叔母さんに頼まれてるんだから、仕方ないでしょうが！」

高志は焦点の合わない目を私に向けて、何かを言おうとしていた。けれど、結局は何も言わず、喉の奥を「ん」と鳴らして済ませた。

「叔母さんだってそろそろ退院するんだから、アンタしっかりしなさいよね！」

面倒臭そうに顔を背ける高志に、思わず奥歯を噛み締めた。言つてやりたいことは、いくらでもある。

女手ひとつで高志をここまで育てた叔母さん。倒れるまで働いたのに、高志はその間部屋に引き籠もっていただけだった。警察官だった叔父さんは、高志が小学校に上がった年に事故で亡くなった。私が生まれた年のことだ。今でも居間の仏壇には写真が飾られている。この家は、その叔父さんが残してくれたものの。

高志は都内の大学を卒業してすぐに就職して、すぐに退職した。ここから離れた街の公立高校で、現代文を教える教師だった。それが今ではこの様だ。

そういったあれこれを考えれば、私が言いたいことなんて山のようにある。こんな男と子供の頃からの付き合いだなんて、情けなくて涙も出ない。

「家のこと、全部やってくるから。せめて自分の部屋くらい掃除しなさいよね」

掃除、洗濯、夕食の準備。叔母さんが入院している間、週に一度はこうして様子を見に来ている。学校帰りの貴重な時間を使って、制服のまま、だ。

油の切れたロボットのような動きでベッドから這い出る高志を見て、私は踵を返した。やらなければいけないことは、本当に山積みなのだ。それよりも、何より――

「アンタ、まずお風呂入って、ひげ剃りなさいよ。すぐ用意するから」
不衛生な男は、大嫌いだ。

一通りのことを済ませて帰宅すると、もう夜の九時を過ぎていた。「ただいま」の声に、お母さんが「おかえり」と返してくれる。いつも通りの、当たり前前の会話。

「お父さんは？」

廊下から居間を覗き込んで、キッチンにいるお母さんに声をかける。

「お風呂入ってるわよ」

何となく悔しい気分を味わいながら、自分の部屋に。鞆をベッドに放り投げて、その上に制服を脱いで放り投げる。部屋着に袖を通して、お母さんの手伝いをするために、また部屋を出た。

夕食は、家族三人揃って食べる。子供の頃にお母さんが決めた、家族のルール。ちなみに、このルールを一番多く破っているのは当のお母さんだったりするのだけれど。

「高志君、元気そうだったか？」

私は溜め息混じりに「相変わらず」とだけ答えておいた。お父さんはそれ以上踏み込んでこなかった。

「通子^{みちこ}さん、早ければ来週にも退院なんでしょう？」

高志のお母さん、通子叔母さんは、お父さんの従妹に当たる人。昔はこの近所に住んでいたらしい。

「今週末に検査をして、その結果次第だけだな」

「やっと私の仕事も終わる訳ね」

叔母さんが入院していた間、毎週あの家でアイツの世話をしていた。それももうすぐ終わるとなると、清々する。本気ですつきりする。

「けど、高志君の様子を見るって言い出したの、千代本人じゃなかったか？」

「あれは……お父さんとお母さんが半ば強制的に決めたんでしょうが」

うちは両親共働き。通子叔母さんには近くに親戚がない。家政婦さんを頼むような余裕はないし、私もアイツもひとりっ子。叔母さんが入院した当初、アイツをうちで預かるという話が出たこともあった。この家にはいくつか空き部屋があるし、ひとりくらい家族が増えても負担にはならない。でも、その話を断ったのは高志本人だった。理由は知らないけれど、どうせ大した理由でもないのだろう。あんな奴の考えていることなんて、理解したくもない。

ということもあって、何故か私にお鉢が回ってきた。当然断った。そして、当然却下された。多数決って酷い文化だと思う。

「一通り家事を仕込んでおいた私に、少しは感謝して欲しいわね」

「いつそ家事なんて出来ない方が良かったかもね」

重い視線を向けても、お母さんはにこにこ微笑むだけ。どんな母親だ。

「それにしても、もうどれくらいになるんだ？」

お父さんが言ったのは、アイツが引き篋もるようになってから、ということ。

「もうすぐ三年」

アイツは私の七つ年上で、今は二十四歳。引き篋もり始めたのが、私が中学校二年の秋口で、今の私は高校二年生。

三年間。あまり短い時間じゃない。私の身長が二十センチ伸びて、体型が別人のように変わるくらいの

時間だ。あれほど気になっていたニキビも、今じゃすっかり消えたし。

代わりにアイツは青白くやせ細り、言葉をおぼえたのかというくらい、無口になった。

「健康ならそれだけで構わないんだが、少しは体も動かさないとなあ」

お父さんは悠長に構えている。何でも、結婚する前に今のアイツと似たようなことをやっていた時期があつたらしい。もつとも、当時は学生闘争だの何だの社会的な風潮があつたので、今のアイツと全く同じ理由ではないのだろうけれど。

「酒も飲まず、煙草も吸わず、運動もせず、勉強もせず、か」

食後のお茶を啜ってから、明後日の方向を見ながらお父さんが呟いた。

「羨ましいなあ」

「ときどき、お父さんの娘つてことが恥ずかしくなるよ」

本音をばつさり言う大人は、はつきりと教育に悪いと思う。

「私にとっては、最高の旦那様よ？ 浮気するほどの甲斐性もないし、へそくり出来るほど器用でもないし」

「分かった。両親が非社会的だと、子供が自衛のために成長するんだわ」

半ば悟ったような心境で、うめくようにして声を絞り出した。

「まあ、それはそれとしても。高志君は、何を考えてるんだらうなあ」

湯のみを置いたお父さんの一言は、私もずっと疑問に思っていたことで、でも、それを知ったところで面白い話じゃないのは目に見えている。

「全く……」

溜め息を吐くだけでは、問題は何も解決しないのだけれど。

私が物心ついたときには、アイツのお父さんは亡くなっていた。アイツは、まるで私の本当の家族みたいにいつも家に来て。宿題をしたり、一緒に遊んだり、おやつを食べたりしていた。小学校に入るまで、本当にお兄ちゃんなのだと思っていたくらいだ。

だんだんと顔を合わせなくなつたのは、確かアイツが高校受験を控えた頃だったと思う。

「先生になるんだ」と言つたアイツは、当時の私よりもずっと子供っぽい目をしていた。きらきらと、夢見る少女のような眼差しだった。

県内でもそれなりに名前の知れた高校に何とか合格して、顔を合わせる機会が更に減つた。勉強で忙しかつたのもあるだろうし、叔母さんを助けるためにバイトをしていたから、というのも理由のひとつだろう。でも、それでも家に来れば私の話し相手や相談相手になつてくれたし、勉強を見てくれたりもした。

今となつてはどうでも良い話だけれど、当時の私はちよつとしたいじめに遭つていた。暴力を振るわれることはなかつたけれど、言葉でだつて人は傷つく。そんな私にとって、高志みたいな人がいてくれるこ

とは、とても嬉しいことだった。

けれど、高志は変わってしまった。それも、良くない方向に。

大学を卒業したアイツは、すぐに公立高校へと通い始めた。今度は教師として、だ。電車で片道一時間半かけて、この町から通っていた。ぴしつとしたスーツとネクタイ。髪の毛までしっかりと決めて、革靴で駅までの道を歩いて。

そんなアイツが、ある日突然部屋から出てこなくなった。最初はみんな心配して部屋に顔を出していたのだけれど、アイツは何も語ろうとしなかった。もちろん、教師の仕事も退職した。あれだけ真っ直ぐに夢を語って、その夢を叶えたのに、一年もせずに自分で壊してしまった。

あの時期、一度だけ高志の顔を見に行ったことがあった。でも、何も話してはくれなかった。ただ、知らない人を眺めるような目を私に向けていた。それが、とても怖かったのを覚えている。

丁度その頃から、私はいじめられなくなった。驚くほどあっさりと。まるで、最初から私に悪意を向けていた人なんていなかったかのよう。

中学三年になると、すぐに高校受験の準備が始まった。緊張感と気だるさを両方詰め込んだ、教室の空気。一年間が、本当に長く感じられた。

無事に高校に受かった私は、一番気楽そうな部活に入った。特にやりたいことはなかったし、うるさいことを言う人のいないところが良かったから。

そして今年、高校二年になって少し経ってから、通子叔母さんが倒れた。過労と心労が原因だった。もちろん、心労というのはアイツのことだろう。過労だって、アイツのせいだ。何もかも全部、アイツが悪い。

それで、入院することになった通子叔母さんの世話を、お父さんが。相変わらず引き篋もっている高志の面倒を、私が見ることになった。

私だって部活があるし、勉強だってある。とても面倒なんて見られやしない。そう反論すると、「それなら週一回で」ということになった。というのも、お父さんから聞いてしまったからだ。通子叔母さんが泣きそうな顔で、何度も頭を下げて「高志をお願いします」と言っていた、と。世の中の不条理を、強く感じた。

週に一回の「出張家政婦」は、半年近く続いている。その間、高志と私はまともな会話をしていない。たったの一度も。

でも、それも当たり前なのかもしれない。私がか言おうとすれば、必ず酷い言葉になる。それを我慢して会話なんて出来ない。高志も、私に何かを言えば酷い言葉で返されることを知っているのかもしれない。それはそうだ。あんな男の言い草を黙って聞いてやれるほど、私は人間出来てない。そもそも、何の相談もなく勝手に引き篋もってしまったのは、アイツの方なのだ。愚痴だろうが弁解だろうが、そう簡単には聞いてやる気になれない。

全く……。

眠る前にどんなことを考えていようが、朝になればすつきりしている訳で。少し肌寒い朝の空気をゆつくり吸い込んで、徐々に目を覚ます。朝ご飯を食べない私は、いつもぎりぎりの時間までこうして眠っている。二度寝をするかしないかの、ぎりぎりのライン。今日もその線の上を漂いながら、深呼吸を繰り返す。

「起きてるー？」

廊下の向こうから聞こえてくる、お母さんの声。この声が、一番正確な目覚まし時計だ。転がるようにベッドから出て、「起きてる！」と返事をする。

今日もこうして、忙しい一日が幕を上げる。

「おはよう」と、通学路で挨拶を交わす。何人かの友達と、何人かの後輩。それと、顔見知りの先輩たち。耳に入ってくるのは、文化祭の話題。クラスごと、部活ごとの出し物は、大抵が「ああ、文化祭だわ」というレベルのものだけど、中には目を見張るようなものもある。どうせなら、と意気込む人たちと、どうせ、と諦める人たちが半々くらいのようにだ。

たくさんの人たちの会話に聞き耳を立てるのは、悪い癖かもしれない。悪い癖というより、惨めな習性

と言った方が正しいかもしれない。まあ、便利なのでそれなりに活用しているけれど。

そんな感じで、今日も一日学校で過ごす。

大人しく授業を受けて、仲の良い友達と一緒にお昼を食べて、眠気と戦って午後の授業をやり過ごして、放課後。惰性的のように、部室に顔を出してみた。「演劇部」と書かれたプレートが、妙に哀愁を誘う。

気楽に挨拶をしながら、ドアを開く。採光窓から差し込む光と、予算をけちったとしか思えない照明が、雑多な物置となつて久しい部室を映し出している。

「ああ、お千代。ちゃんと来たか、偉いぞ。そろそろ文化祭の演目を決めるからな」
にっこりと笑う副部長の鈴木先輩に、どっと疲れが出た。見た目だけなら柔道部と言われても納得しそうな体格の人がこんな人懐こい笑顔を浮かべると、どうしても違和感がある。どうせなら怒鳴り飛ばしてくれた方がそれらしいというものだ。

「お千代先輩、お疲れ様です」

一年生の広瀬君と、三年生の伊藤部長が向かい合って、いくつかの紙束を手にしていた。どうも脚本の草稿らしい。床に置いてある畳の上につったりと座って、眉間にしわを寄せている。何故畳が置いてあるのかは、未だに良く分からないけれど。

「宮河さんは？」

誰にともなく聞くと、律儀な鈴木先輩が「今日は手芸部」と教えてくれた。

総員五名。精鋭揃い、と言えれば格好もつくのだけれど、実際のところ廢部寸前の部活。それが、この演劇部だ。大会に出る気もなければ、部員を増やすつもりもない。なくならなければそれだけで良い、というのが顧問の斉藤先生の方針だ。

「それで、どこまで進んでるんですか？」

部長の手元を覗き込みながら、それとなく聞いてみた。すると、部長は黙って首を横に振った。要するに、全然ダメということなんだろう。

「一応、いくつかのジャンルで書いてはみたんですけどね……」

広瀬君は手にしていた紙束を畳の上に放り投げた。

「そもそも、指示が曖昧すぎますよ。『何か面白そうなの』って言われても困ります」

まあ、部長の口からそれ以上の指示を聞いたことがないのだけれど。耐性のない一年生にはちよつと辛いかかもしれない。苦勞して捻り出したアイデアを片端からダメ出しされれば、普通拗ねる。

「だいたい、今更演目から決めようなんて遅すぎますよ。聞いてますか、部長」

広瀬君の苦情は、あっさり無視された。部長が半分眠ったような目を私に向けて、言う。

「お千代ー、何人くらい集められそう？」

「部長、スカート……」

だらしく足を広げる部長と、それを見て呆れる広瀬君。そろそろ部長のこういう大雑把な性格にも慣れる頃だと思うのだけれど。それはそれとして。

「鈴木先輩は何人いけます？」

「集まって五人。でも、セツト作るのに人手が要るからなあ」

鈴木先輩は見た目の通り、大道具担当。実家が配管工で、ときどきバイトで現場を手伝っているらしい。そういうこともあって、セツトの製作はかなり手際良く進む。

「役者決めてから当て書きしよう。そっちのが楽だし」

「だから、どういうジャンルでどういう劇にするのかを決めてからじゃないとすねえ……」

広瀬君の抗弁ももつともだ。でも、この人が部長なのは揺るがない事実。頭の中で暇そうな人間をリストアップして、尚且つ演技が出来そうな人間を抜き出す。

「十人は集まると思いますよ。剣道部、バスケット部、バレエ部、弓道部、美術部に吹奏楽部ってトコですかね。さすがに生徒会からは抜けないでしょうけど」

指折り数えると、大体それくらいになった。

「剣道部、弓道部、それと吹奏楽部から男子を二人ずつ借りてきて」

珍しく具体的な指示を出して、部長はまた草稿と睨めっこに戻った。多分、頭の中ではもうある程度の方向性が決まっているのだろう。広瀬君は隣で盛大な溜め息を吐いていた。

「鈴木先輩、ついて来ます?」

「俺は放送部と打ち合わせ」

効果音と音楽の件だろう。それも本来は脚本が決まっただけだ。

とりあえず、言われた通りにしないと部長の機嫌が悪くなるので、部室を出た。

交渉は意外と簡単に進んだ。というより、そもそも交渉するようなこともなかったのだけれど。それというのも、私の普段の「部活動」はあちこちに顔出しをして交流を深める、言わば広報兼営業な訳で。

文化祭の準備期間が始まる前に、ある程度話は済んでいるのだ。これも部員の少ない演劇部が生き残る、苦肉の策。私が入学する前の年は、あまりに役者が集まらなかったため、顧問の斉藤先生が用務員さんまで舞台上げたらしい。それはそれで好評だったそうだが。

部室に戻ると、広瀬君と部長があれこれと言ひ合いを続けていた。二人とも、真剣な顔つきでメモ用紙にペンを走らせている。

「役者の確保、終わりましたよ。一応、他にも裏方要員に何人か声かけておきました」

「次、生徒会に予算申請と舞台使用許可申請」

こちらに目も向けようとしてない上、命令口調。さすがの私も、少しだけ帰りたくなった。

「あと、帰りに飲み物買って来て」

「ついでに僕のもお願いします」

……脚本家という人種が心底嫌いになれそうな気がした。

だんだんと早まってきた、夕暮れ。校舎の窓から差し込む光が、斜めに廊下を照らし出している。あちこちの教室から、話し声が聞こえて来る。文化祭前の、ちょっとした相談だろう。本格的に慌しくなるのは、週末くらいからだろうか。廊下を行き交う人たちの間を縫って、生徒会室へ向かう。

と、丁度生徒会室から出てくる人影があった。プリントの束を両手に抱えて、こっちに向かって歩いてくる。彼女は、私の友達だ。

「真保、お疲れさん」

軽く手を上げて挨拶をすると、小走りに近寄って来た。笑顔を浮かべて、私に挨拶を返してくれる。

「千代ちゃん。珍しいね、こんな所で」

「部長に頼まれちゃってさ。文化祭関係の書類」

真保は生徒会で会計を担当している。さすがに生徒会室に顔を出すのは億劫なので、助かった。「ちょっと待ってて」と言っ、プリントの束の中から何枚かを取り出してくれた。

「さんきゅ」

「ううん、いいよ。丁度顧問の先生たちに渡すところだったし」

ということ、別に焦って取りに来る必要もなかったんじゃないだろうか。

「演劇部は最優先で使用許可が下りるけど、あまり長時間使用すると他の部の迷惑になるから、気をつけてね」

「ま、部長次第だわね」

もっとも、それほど長い劇が出来るほど、稽古する時間はない。長くて三十分とあったところだろうか。

「それ、運ぶの手伝おうか？」

一応、聞いてみる。どうせ答えは分かっているのだけれど。

「いいよ。私の仕事だし、ひとりで出来ることだから」

思った通りの返答に、私は微笑みを返した。真保のこういうところは、本当に好きだ。

「じゃ、行くわ。ありがとね真保。また明日」

手を振る私に、真保は笑顔を返してくれた。

外廊下を歩いて、部室長屋の隅にある演劇部の部室へ。右手にはプリントが何枚か。左手には缶ジュースを三本抱えて。

扉を閉めて、改めて室内を見ると——部長が、凄いい勢いで紙にペンを走らせていた。

「ああ、解決したのね」

広瀬君に缶を手渡す。彼は複雑そうな顔で「どうも」とお礼を言って、すぐにプルタブを開けて、大きく喉を鳴らしてジュースを飲む。部長の分の缶を机の上に置いて、私も一息。

「後はもう問題ないでしょ？」

椅子を引き寄せて座って、軽い調子で広瀬君に声をかける。

「僕のプライドが粉砕されたことを除けば……」

それはそうだろう。広瀬君が何年くらい脚本の勉強をしてきたのかは知らないけれど、部長は現役のプロなのだから。こういうことは、毎日休まず続けている人の方が圧倒的に強い。

「で、どんな話になるの？」

「喜劇ですよ喜劇。それもファンタジーの。良いんですかね、年に一度しかない演劇部の出番なのに」

「部長が良いって言うんだし、良いんじゃない？」

人格に問題があっても、部長の感性が確かなのは実証済みだ。去年の文化祭で痛感した。

「それともシャイクスピアの悲劇とかがやりたい訳？」

「シェイクスピアとか、面白味が分からないんですよね」

「奇遇ね。私も」

時代背景も国も倫理観も社会常識も現代とは違うのだから、分からなくても仕方ないと思う。その内、例えばあと二十も歳を取れば面白く感じるのかもしれないけれど。

「あの企画書、冗談だったのに……」

「後悔しても遅いわね。それに、選ばれたくなかったら見せなければ良かったのよ」

相当打ちひしがれているみたいだ。背中に哀愁が漂っている。とても十代の青少年の放つ雰囲気とは思えないくらいに。

「じゃ、私帰るから。書類、部長が正気に戻ったら見せておいて」

「ええ、また明日」

ひらひらと手を振って、部室を出る。部長は多分、私が戻ってきたことに気づいてすらいないだろう。そういう人なのだ、全く……。

文化祭の準備が、本格的に始まった。

私たちのクラスの出し物は、無難に屋台ということになった。人数が少なくても回せるから、というのが一番の理由。やっぱり、他の出し物を見れないと面白くないし。

お昼休み。いつも一緒にお弁当を食べる真保は、今日も生徒会室に行っている。紙パックのオレンジジュースをちるちるとすすりながら、ぼんやりと教室を眺める。こうして第三者の視点で眺めていると、人間関係が垣間見れて面白い。特に女の子同士が面白い。表面上は穏やかにしていても、ちくちくとした悪意が見え隠れしている。目の粗いやすりを少しだけ押し付け合っているような、そんな悪意だ。

耳の後ろを、爪でかりかりと搔く。どうしてこんなにも悪意に敏感になったのか。その理由を考える度に、惨めな気持ちになる。最初は自分に向けられた悪意しか分からなかった。でも、気がつけば他の人に向いている悪意まで分かるようになっていた。分からないのは、その対処法だけ。ひとつの問題が解決しても、次から次へと問題が出てくる。砂漠に水を撒くようなもので、キリがない。だから私は、傍観するだけ。それに、悪意というのは意外と長続きしないものなのだ。

そう。悪意によって傷つけられた人の痛みとは違って。

掌を、耳の後ろから首の後ろに滑らせる。じくじくと鈍い痛みが、頭を刺している。どうせなら、悪意なんて気にもせず好きなように生きられたら良かったのだけれど。

チャイムが鳴って、みんながそれぞれの席に戻り始める。空になった紙バックをごみ箱に向けて放り投げた。理想的な放物線を描いて、バックは、ごみ箱に吸い込まれた。小さく拳を握る。

何だかんだ言っても、今日は調子が良いのかもしれない。

放課後、私たちは屋上に来ている。申請すれば、簡単に使うことが出来る場所のひとつ。特に演劇部は発声練習もあるので、屋上使用は常連だ。

今日は宮河さんも顔を出している。手芸部と掛け持ちの彼女は、主に衣装を担当している。役者さんのサイズを測るのも、彼女の仕事だ。

「それじゃ、まずは発声練習から」

部長が珍しく真剣な面持ちで、集まってくれた役者さんたちに声をかける。

「私に続いて」と言つて、部長が声を出す。良く通る声が、校庭の向こう側まで木霊した。続いて、役者さんたちも。さすがに体育会系だけあって、ちゃんとお腹から声が出ている。部長は特に何も言わず、続ける。

私たちの隣では、宮河さんがひとりずつ順番に体のサイズを測っている。慣れた手つきで、順序良く。あの様子なら、すぐに終わるだろう。

「それじゃ私は帰りますね」

「だめ。お千代も混ざるように」

部長の冷酷な指令に、私は黙って従うのだった。

次の日には、台本が出来上がっていた。部長が手書きしたものを、広瀬君がパソコンで清書したらしい。夜遅くまでかかったらしく、目の下が少し黒くなっていた。

部室に集まってくれた役者さんたちに、台本を配る。

「それじゃあ、まずは配役から——」

部長がゆつくりと名前を読み上げ、それぞれに簡単な役割の説明を付け加えていく。ちなみに、鈴木先

輩は数人の有志を連れて体育倉庫でセットの製作。宮河さんは手芸部で衣装の製作に当たっている。

こうなると、私はやるのがない。とはいえ、逃げ出せる空気でもない。仕方なく、台本を斜め読みする。斜め読みして、すぐに脱力してしまった。

「何よこれ……」

タイトルだけはそれっぽいのだけれど、内容が問題だ。簡単に説明するなら、ひとりのお姫様を奪い合って、各国の王子様たちが戦う話。実行使に出た竹取物語のような感じだろうか。——シリアスな部分が多とんどないことを除けば。

私の呆れ顔と溜め息混じりの言葉を察したのか、広瀬君がそつと隣に寄ってきた。

「面白いですけど、面白さの方向性はこれで良いんですかね……」

根が真面目な彼には、シヨックが大きかったのかもしれない。目の下のくまは、ひよつとしたらそのシヨックのせいだったりはしないだろうか。

「まあ、文化祭だしね……」

そんな私たちの苦悩をよそに、部室内には台本に目を通した役者さんたちの、腹の底からの笑い声が響いていた。

お風呂から出て、机に向かう。ささっと宿題を終わらせて、台本を開いた。そこには既にいくつかの書

き込みがされている。台詞やト書きの修正だ。役者さんたちに合わせた台詞回しや演出を、その場で部長が変更する。当日には、この台本もぼろぼろになっているだろう。

部室では大うけだったシナリオに、改めて目を通してみる。良くもまあ、こんな下らないことばかり思いつくものだと感心する。思わず頬が緩んでいることに気づいて、誰もいないのに咳払い。

落ち着いて読み直してみると、確かに面白い。笑えるだけじゃなくて、ちゃんと締めるべきシーンは締めてある。人物の役割としては、お姫様が主に場を締める役目を担っているようだった。それと、話の最終的なオチも。

しばらく読み進めっていると、気になる台詞があった。何てことのない台詞。コミカルなシーンの隙間にある、物語を進めるための台詞。それが、何故か頭に焼きついた。

繰り返し、その部分だけを読む。それは、お姫様の台詞。クライマックスを目の前にした、ほんの一時の風のような台詞。多分、実際に舞台上で演じたとしても、誰も深く意味を追求しようとはしないだろうと思う。

「全く……」

そのページを開いたまま、椅子の背もたれに体を預ける。部長も、どういった思惑があつてこんな台詞を書き込んだりしたのか。

シナリオの脇には、文化祭のチケットが数枚置かれている。あつてもなくても基本的に入りは自由だ

けれど、一応形式上発行される、生徒以外のための入場券。

「憧れるだけの英雄なんていません、か……」

そんな台詞が、頭に焼き付いてしまったのだった。

私が、今の私になる前のこと。はじめを受けていた頃のこと。理由は簡単。太っていたから。それに皮膚も弱くて、顔が酷いまだら模様になっていた。背も低くて、運動も出来ない。何か言葉を喋ろうにも、声はしゃがれ声。友達も満足に作れなかったし、学校も休みがちだった。

物心ついたときから、私は迫害されるのが当たり前になっていて。でも、家にいるときだけは穏やかな気持ちでいられて。それでも、学校には出来るだけ通いたかった。お父さんとお母さんを心配させるのは、嫌だったから。

そんな私にとって、アイツは——高志は、特別なひとりだった。

私をいじめない。私に優しくしてくれる。大きくて、元気で、賢くて、強かった。高志と一緒に遊んでいるときは、穏やかさとは違う感情で満たされていた。幸せな、涙が溢れてくるくらい幸せな、時間。その感情が恋だと気づく前に、高志はこの町を離れていった。

別れ際の言葉を、覚えている。

「寂しくなったら呼びなよ。飛んでくるから」

七つ年上の、優しい幼馴染のお兄さん。いじめられっ子だった私にとって、高志の言葉は特別な言葉で
いじめられても、馬鹿にされても、無視されても、高志に泣きつくような真似だけはしないと、そう決
めたのだった。

照明を落とした部屋、ベッドの上で、眠れないまま寝返りを繰り返していた。

「全く……」

溜め息と共に吐き出した声は、しゃがれた声じゃない。体が成長するにつれて、ちゃんと女らしい声も
出るようになってきた。肌も強くなったし、背も伸びた。でも、肝心なところは全く変わっていないのか
もしれない。

あの頃、私が部屋で泣いていると、高志がいつも慰めてくれた。たくさんの言葉で、私を支えてくれた。
考え方も、話し方も、使う単語のひとつでさえ、高志が教えてくれたようなものだ。だから、今の私がこ
ういう風になったのは、ほとんど高志の影響なのだろうと思っている。

けど、だからこそ、赦せないこともある。それはとても醜くて惨めで、自分勝手な感情で――

「全く……」

いつも夕方まで眠っているアイツは、今頃何をしているのだろうか？

朝から曇っていた空は、昼過ぎには雨を降らせていた。憂鬱な天気には、思わず溜め息が漏れる。窓の外を見ないようにながら、午後の授業をやり過ごした。

ホームルームが終わると同時に、教室からみんなが飛び出して行った。文化祭の準備も、そろそろ本格的に始まってきている。浮ついた気分は、天候なんかに影響されないようだ。

私はといえば、昨夜あまり良く眠れなかったせいもあって、どうも気分が良くならない。

ぐちゃぐちゃな頭の中を整理するように、鞆に教科書を詰め込む。いつもよりも重く鈍い指先を、ぼんやりと他人事のように眺めながら。

誰もいなくなった教室。廊下から聞こえてくる、笑い声や怒鳴り声。浮ついたトーンの声。溜め息を堪えられなかった。席についたまま、一歩も動けずに窓の外に視線を動かす。雑に塗りつぶした灰色に、ノイズが混じっている。細く短い、不揃いな線。

「——さん」

誰かの声が聞こえて、それが私を呼ぶ声だと理解して、その声の方向に顔を向けた。誰もいなかったはずの教室に、私の席のすぐ隣に、男の子が立っていた。

「あの、俺のこと知ってるかな？」

忙しなく定まらない視線。私に向けられているのか、それとも私を取り巻く世界に向けられているのか、

どっちともとれる視線。

「吉野君」

同じクラスになったことはないけれど、同じ中学校出身。高校に入ってから帰宅部。駅近くの楽器屋でバイトをしている。友達はそのほど多くないけれど、特別仲の悪い人もいない。良くも悪くも目立たない、地味な子。そんな一通りのことが、頭にぱつと浮かぶ。普段の「部活動」で仕入れた、それなりの情報だ。

「ああ、良かった。それでさ、急なんだけど——」

定まらない視線。落ち着かない足元。上気した頬。途切れがちな言葉。時々私の目を覗き込む視線に込められた、悪意と正反対の感情。何を言うのかは、聞かなくても分かる。この子もまた、私に告白しようとしているのだ。それも、よりによって同じ中学校出身のこの子が、だ。

吉野君はあれこれと言ひ募って、熱心に私の気を引こうとしている。私が黙ってぼんやりとしているので不安なのだろう。言っていることに嘘はないし、悪意も感じられない。でも、少しお喋りが過ぎる。言葉は重ねれば重ねるほど方向性が乱れてしまうというのに。

「ごめんね、部活あるから」

「あ、その、返事は……?」

申し訳なさそうな笑顔を浮かべて、角の立たないように「さよなら」と挨拶をする。多分、これで諦め

てくれるだろう。足早に教室を離れる。

階段を下りながら、また溜め息がこぼれてしまった。

「好き、ねえ」

それならどうして、と思ってしまう。

どうして、好きなだけでは我慢出来ないのだろう。

どうして、相手にその感情を押し付けようとするのだろう。

どうして、綺麗な部分しか見ようとしなのだろう。

「酷いわね、私は」

私と彼は、違う人なのに。

部室に行くと、誰もいなかった。みんなの荷物が置いてあるということは、多分体育倉庫だろう。大掛かりな作業をするので人手がいる、と昨日話していた。

いつもは部長が占領している畳の上に、ぺたんと座り込む。鞆の中からお菓子とパックのジュースを取り出して、ごろりと横になる。どうにも気分が乗らない。傘を差して雨の中を歩くことを考えると、帰ることですら面倒に思えてくる。

お菓子を一口。ジュースを一口。雨の音と、外から聞こえるたくさんの声。楽しんでる声、努力して

いる声、苦勞している声。愚痴も、悲鳴も、叫び声も聞こえてくる。もつと耳を澄ませば、車が塗れたアスファルトの上を駆け抜ける音も聞こえてくるだろう。木々の枝葉を叩く雨粒の音すらも聞こえるかもしれない。

目を閉じると、心臓の音が聞こえた。我ながら気弱な音だな、と自嘲的に思う。

ジュースを口にする。鞆の中でマナーモードにしておいた携帯が鳴っている。体を起こして鞆に手を伸ばして、携帯電話を開く。

相手はお母さんだった。話の内容を聞いて、少し気分が軽くなって、それ以上に重くなった。そういう内容だった。

「……分かった」

反論する気力もなく、携帯を鞆に放り込む。一度だけ深呼吸をして、お菓子を一気に口に入れて、乱暴に噛み砕いて、ジュースを飲み干す。

「全く！」

声を上げて立ち上がって、部室を出た。

みんなには申し訳ないけれど、今日はこれで帰らせてもらおう。フォローは後であれば良い。無理矢理に歩幅を広げて、足音を立てて、奥歯を強く噛んで、玄関を目指す。

すれ違った人が、私の顔を見て怯えたように体を強張らせていた。

アイツの住む家は、団地の一角にある。狭い路地で入り組んだ、車で入るには少し苦勞しそうな場所。ブロック塀の何か所かは、角を擦った跡がある。そういう場所だ。

早足で歩く。傘を差していたって、多かれ少なかれ雨には濡れてしまう。それなら、少しでも早く目的地に着いた方がマシだ。呼吸が弾むのにも構わずに、歩く。

スカートのポケットから鍵を出して、玄関を開ける。相変わらずの留まった空気の匂いと、それに混じる湿気の匂い。おじやましますも言わずに玄関に上がり、階段を上がる。わざと足音を立てて。

アイツの部屋の扉を、勢い良く開ける。それからベッドを見て、アイツがいることを確かめる。

「起きてるんでしょ？」

そんな気がしたので、声をかけてみた。じつと睨みつけていると、高志は面倒臭そうに体を起こした。喉の奥だけで声を出して、私の方を見る。

「叔母さん、来週の金曜日に退院だって」

お母さんからの電話の内容を、簡潔に伝える。伝えて、奥歯をかみ締める。そうでもしないと、色々言ってしまうそうだった。どうして電話線を抜いているのか。どうして毎日ひげを剃らないのか。服を着替えないのか。部屋を片付けないのか。ご飯はちゃんと食べているのか。訊きたいことなんて、いくらだつてある。

「そうか」

久し振りに聞いた高志のまともな台詞は、決してまともとは言えない内容だった。かみ締めていた奥歯から、力が抜けてしまうくらいに。そして、淀んだ空気を胸いっぱい吸い込んでしまうくらいに。

「アンタね、結局一度もお見舞い行かなかったでしょ？ 心配じゃないの？ 通子叔母さんはね、働きすぎて倒れたんだよ？」

高志は黙っていた。黙っていたから、私がしゃべり続けるしかない。

「いつまでこんなこと続けるのよ？ いつになったら気が済むのよ？ 何がたくてこんなバカみたいなこと続けてるの？」

声が、震える。震えて、詰まった。言いたいことなんて、いくらだってあった。ありすぎて、言葉にならないくらいに。

「あれだけ偉そうなこと言ってたのに、全部嘘だったって訳？ 何か言いたいことかないの？」

高志は黙って聞いている。顔を伏せて、指先ひとつ動かさずに。

目の奥が、滲む。

「途中で投げ出すなら、夢なんて語るな！ 嘘にするなら、優しくするな！ 被害者ぶってたって、誰も同情なんかしてくれないわよ！」

高志がどうしてこんなことになっているのか、私は知らない。聞いても教えてくれなかった。話そうと

してくれなかった。だからこそ、余計に頭にきた。

私はずっと、腹を立てていたのだ。

「バカ！」

言葉が刺さるなら、刺さってしまえば良いと思った。そう思って、叫んだ。叫んで、部屋を飛び出した。泣いてなんかいない。泣いてなんかやらない。悔しくもないし、哀しくもない。だって私は、変わったのだから。もう、いじめられっ子の、背の低い太った私じゃないのだから。

あの台本にあった台詞が頭に浮かぶ。吉野君が私に向けた感情が思い出される。アイツの、惨めに丸められた背中が脳裏をよぎる。

泣いてなんかいない。雨のせいじゃない。傘も差しているし、鍵も閉めてきた。何も問題はない。来週には叔母さんも退院するし、そうすれば私が高志の世話をする必要もなくなる。文化祭も近いし、それが終われば三年生は引退。自然と私が演劇部の部長になる。進路のこともある。自由になる時間なんて、どんどん少なくなる。高志のことなんて、思い出せなくなるくらいに。

「ちくしょう……!!」

どうして私は、あんなことを言ってしまったのだろう。高志は、私をずっと守ってくれていたのに。

後悔が早く終わるように、家路を急いだ。

土曜日。学校は休みだけけれど、文化祭一週間前なので登校は許可されている。もちろん、演劇部だって集まって作業をする予定になっている。昨日から降り出していた雨は、朝にはすっかり上がっていた。空はいつもよりも濃い青さで、徐々に高さを増している。暑さが温かさに変わる。吹く風が少しずつ強くなる。朝晩の冷え込みも厳しくなっている。また、季節が変わる。

土曜日。本当なら、今頃は学校で部員の人々とあれこれ作業をしているはずだった。現に、携帯電話には何度も着信があった。全部無視して、今では電源を切つてある。

ベッドから起きる気になれず、枕に顔を押し付けたまま、目を閉じる。考えるべきことはいくらでもあった。やるべきことだつて山積みだ。でも、何もしたくない。考えたくない。眠り続けられるものなら、ずっと眠っていたい。

土曜日は、そうやつて一日を過ごした。

日曜日。お母さんは時々様子を見に来てくれる。私は「頭が痛いから」と答える。我ながら弱々しい声だ。

何もしなくてもお腹は空くし、何も食べなくてもトイレには行きたくない。そんなことを、この歳になつて初めて知った。

携帯電話の電源を入れる。メッセージがいくつか残っていた。そのまま一括削除する。着信履歴も、つ

いでにメールも全部削除。バッテリーを外して、握り締めてみる。別に私が充電される訳でも、私で充電出来る訳でもない。意味のないことをしている。

お風呂に入って、少しだけご飯を食べて、ベッドに戻って、無理矢理目を閉じる。気がつくくと、眠りに落ちていた。

月曜日。今日からまた一週間、学校が始まる。顔を洗って、制服に着替える。鏡の前でふと思った。自堕落になろうと思えば、いくらでもなれるのだな、と。でも、時間が過ぎただけで、時間を過ごしたという実感がなかった。

高志はずっと、こんな日々を送っていたのだろうか。

朝から日差しが強い。まるで、夏が一瞬戻ってきたかのようだ。忘れ物でもしたのだろうか、と下らないことを思っただけで前髪をかき上げる。そろそろ、いつものペースに戻らなくてはいけない。「お千代」は、こんな陰気なキラクターじゃやない。もっと皮肉っぽく笑って、それでいてみんなの手助けが出来なくてはいけない。それが、悪意を向けられない秘訣。いじめられず、邪魔者にされず、無視されない。みんなのことを良く知っていれば、悪意を避けることだって出来る。目を逸らして、逃げ出すことも。

「お千代、おはよう。大丈夫なん？」

背中をぼん、と叩いてきたのは、伊藤部長だった。

「おはようございます。土日、すみませんでした。ちょっと具合悪くて寝込んでました」

「まだ調子悪そうね」

眠気が丸々残ったような目で心配されても、苦笑するしかない。

「寝すぎて頭が鈍ってるだけですって。部長の方がしんどそうですよ」

「締め切り前ってのは、何故か部屋が綺麗になるのよねえ」

テスト前日に部屋を掃除したくなるのと同じ理屈なのだろう。

「本調子じゃないなら、今日は顔出さなくても良いから。その代わり、明日からは休む間もないけど」

切り口上でそう言うと、部長は早足で先に行ってしまった。あの見た目に似合わず、健脚なのだ。もっ

とも、この坂道を毎日歩いていけば、誰でも足腰が丈夫になりそうなものだけれど。

「ふう……」

溜め息を吐くために吸い込んだ空気が澄んでいて、複雑な気分になった。

教室に向かう廊下で、吉野君とすれ違った。彼は何か言いたそうな顔で立ち止まっていた。私の「おは

よう」には答えてくれなかった。

席に着くと、何人かの友達が私の周りに集まる。話の内容は、いつもと同じ毒にも薬にもならない話。

標準的な高校生が話すこと。相槌を打ちながら、予鈴を待つ。

朝のホームルームで触れられたのは、文化祭の話。それと、文化祭のすぐ後にある中間テストの話。良い話と悪い話がセットになっているのは、世の常。それが終われば、今度は何度目かの進路希望調査だ。考えただけで気分が重い。

午前中の授業、午後の授業は、いつもよりもぼんやりとしていた気がする。おかげでノートを取り損なってしまった部分が何か所かあった。後で誰かに写させてもらおう。

放課後。部室に行く気にもなれず、帰る気にもなれず、かといって教室に残る気にもなれなかった。仕方ないので、いつもより遠回りをして家に帰った。

夜。考えがまとまらない。というより、考えられない。

あまりにたくさんの方がありすぎて、私には対処することが出来ない。会社員が鬱病になるのはこういうときなのだろうか、とふと思う。どうにもならないのに、どうにかすることを求められる。助けは求められない。頼れるのは自分の身ひとつ。

違う。そうじゃない。助けなんて求めてしまえば良いのだ。出来ないことは、出来ないのだから。出来るようにするためには、誰かに教えてもらったり、助けてもらったりするしかない。でなければ、失敗を繰り返して、教訓を学び取るしか。

私は誰に助けを求めれば良いのだろう。誰なら私を助けてくれるだろう。思い浮かんだ顔に、胸がきしりと音を立てて痛んだ。高志だ。

でも、私が抱えている問題のひとつは、紛れもなく高志のことで。その張本人に、私は啖呵を切ったばかりで。そんな相手に助けを求められるほど、私の面の皮は厚くない。

どうにか——どうにか、したいのだろうか。どうにかしなくてはならないのだろうか。そもそも、私はどうしたいのだろうか。もっと突き詰めるなら、これほど悩むだけの問題なのだろうか。

きっかけは、部長の書いた脚本だった。その中の、たったひとつの台詞だった。でも、その台詞が私に衝撃を与えたのは、高志がああいう状況になってしまっているからで。そんな不安定なときに告白をされて、相手が中学校時代の同級生——私がいじめられていたことを当然知っている人で——

「勝手だわね」

何も語らない高志も、好意を一方的に押し付けようとした吉野君も、何てことない台詞のひとつで私をここまで追い詰めた部長も——私自身も。

みんながみんな自分勝手で、でも、足掻いている。それは分かっている。赦さなきゃならないのに、受け入れなきゃならないのに、ちゃんと向き合わなきゃならないのに、それが出来ない。

ベッドから手を伸ばして、鞆を探って、台本を取り出す。寝転んだまま、ページをめくる。

剣の国の王子が、姫に言う。貴女のお父上は本当の英雄でした。私は亡き王に憧れ、剣の国を率いる者

として、技を磨き上げました。今では私も英雄と呼ばれるようになりました。この剣と技で、貴女をずっと護り続けます。貴女のお父上が貴女を、そしてこの国を護り続けたように。

姫は答える。貴方にとって英雄でも、私にとってはただの父親でした。傷つくこともあれば、悩むこともありました。それを見ず、知らず、ただの偶像としてしか捉えない貴方を、どうして愛せましょう。憧れるだけの英雄など、私にはいりません。

ここで照明が落ちる。そして、姫がボケる。剣の国の王子は退場。次の、水の国の王子に場所を譲る。

——私に必要なのは、どんな人なのだろう。このお姫様は、ボケなかったら何と続けていたのだろう。

思わず、頬が緩んでしまった。部長が書いた脚本に深い意味を求めても仕方ない気がしてきた。あるがままに受け入れて、何も考えずに楽しむ。それが部長の書く物語だ。深読みしようなんて、面白くなくなるだけだ。

明日は部活に出よう。きっと、今日よりはマシな気分朝を迎えられるだろうから。

「さて、こうして無事に全員揃った訳ですが」

珍しく真面目な口調で、部長が切り出した。嫌な予感がした。

「主役のお姫様役をやるはずだった私が、急遽降板することになりました」

部員全員から不満のブーイングが上がる。文化祭までもう日がないのに、今更降板だなんて、どう考え

でも無茶だ。

「理由は聞かないで下さい。答えられません」

「……面倒になったんじゃないでしょうね？」

「それもある」

広瀬君のツツコみにもめげず、部長が続ける。

「で、主役はお千代に交代ということで。よろしく」

「はあ!？」

思わず本気で声を出してしまった。どういう流れでそうなるのだ？

「大丈夫。台詞は好きに変えて良いから。役者さんたちにも了解取つてあるし」

「でも、だって、そんな、えええ……」

あまりの展開に、正しい反論が思い浮かばない。というか、どう考えても無謀だ。

「嫌なら誰か代役連れて来なさい。この時期になってやってくれるような子がいれば、だけど」

「ひょっとして、最初から私に主役やらせる気だったんですか？」

そんな気すらしてきた。部長の突拍子もない悪戯は、今日に始まったことじゃない。でも、これはいくら

何でもやりすぎだ。

「ま、来年は部長なんだしね。顔売っておけば？」

「そんな他人事みたいに……」

「とうか、他の部員はどうなのだろう。私が主役をやることに反論はないのだろうか。反論してはくれないのだろうか。」

「まあ、お千代先輩なら……」

「衣装のサイズも、それほど変わりませんしね」

「さすがに俺がやる訳にもいかんしな」

「酷い。酷すぎる。」

「さ、役者さんが待ってるから舞台へ行こうね」

部長に首根っこを捕まれて、部屋から引つ張り出された。

「だ、台本！　せめて台本を！」

「良いよ台詞なんて適当で。むしろもう全部アドリブで」

「そんなの劇じゃない！」

抵抗は無駄だと分かっているけど、諦めきれないこともある。舞台上がるなんて、冗談じゃない。

ばたばたと足掻く私を、他のみんなが生暖かい視線で眺めていた。

幕を閉めたままの舞台にセットを仮置きして、稽古が始まった。小道具と衣装はもう出来上がっている

ので、それなりに雰囲気が出ている。今日は効果音と音楽の調整も併せて行うので、放送部の人たちもいる。結構な人数が、舞台に意識を集中させている。

そんな中、私だけが台詞のひとつも入っていないまま、稽古が始まった。

正直、昨日までとは違うタイプの憂鬱さで押し潰されてしまいそうだった。

物語自体はコメディということもあり、主に役者さんたちの動きのある演技が主体になっている。ときどき入る滑稽な台詞が、それにアクセントを加えている。私の演じるお姫様は、それぞれのシーンの間にしか台詞がない。それが救いだった。コミカルな動きを要求される訳でも、難しい台詞を要求される訳でもない。

とはいっても、まともに舞台に立ったことのない人間が主役級の扱いを受けているというのは、プレッシャーが半端じゃない。王子様役の役者さんたちがこつちを見るだけで、体が強張ってしまう。

それでも、部長の的確な指導のおかげで、物語の流れを止めない程度の演技は出来るようになった。我ながら逆境に強いと感心してしまう。もともと、もらった台本を真剣に読んでおかなかったのが悪いのだけれど。

「今日はここまで。明日は舞台が使えないから、部室で細かい演出の打ち合わせをします。出来るだけ都合をつけて参加して下さい」

さすがの部長も、助っ人役者さんたちにはちゃんと礼儀正しく接するらしい。私とはいえば、その場へへたり込んで、立つ気力すら残ってはいなかった。

「お千代先輩、大丈夫ですか……？」

心配そうに顔を覗き込んだ宮河さんに、笑顔で答える。

「無理」

疲れているときこそ、本音は隠せない。恨めしい視線で部長の姿を探したけれど、さっさといなくなっていた。

夕食を済ませてお風呂から出てすぐ、台本を開いた。今日の稽古で分かったけれど、確かに適当な台詞でも劇は進む。でも、ちゃんとした台詞と、ちゃんとした演技。そのふたつがなければ、私が、お姫様があの舞台にいる意味がない。

他の役者さんたちは、助っ人とはいえちゃんと自分の役柄を理解し、変更やアドリブを織り交ぜながら、キャラクターそのものに成りきっている。キャラクターを作り上げている。そんな中で私ひとりがただ突っ立っているだけでは、劇じゃなくなってしまう。

「全く……」

部長を呪いたい気持ちを抑えながら、台本にペンで覚書きを書き加えていった。

寝不足で足元がふわふわしている。廊下の壁に沿って歩きながら、玄關へ。

「今日は高志君の家に行く日だからね」

お母さんに気のない返事を返して、家を出た。

眠気と戦いながら、お昼休みになった。真保は会議がないらしく、久し振りに一緒にお昼。

「主役、やるんだって？」

「何故か、ね……」

世の中にこうして理不尽が増えてゆくのだろうかと思つた。

真保が食後の歯磨きに行っている間も、私の目は台本を追い続けていた。台詞を丸暗記することは、とつくに放棄している。それなら、前後の流れを覚えてしまおうと苦戦している最中だ。でも、内容が突拍子もないので、流れも何もあつたもんじやない。おかげで頭が破裂しそうだ。それに、必死になって覚えようとしている内容がコミカルすぎて、気合が抜けてしまう。他の役者さんたちは良く覚えられたものだと思う。私は今にも逃げ出してしまいたいというのに。

結局、午後の授業の最中も、私と台本との格闘は続いた。

帰りのホームルームが済むと、他のみんなと同じように教室を飛び出した。鞆は置いたまま。目指す場所は屋上。鍵を持っているのは部長で、あの人は最後まで授業を受けるほど殊勝な人じゃない。案の定、屋上への扉は鍵が開いていた。多分ホームルームを抜け出したのだろう。実に部長らしい。

「お千代、早いね」

「今日、ちよつと用事があるんですよ。だから最後までいられなくて」

「何か質問ある？」

部長の手には、台本。私の物よりもずっとくたびれた、付箋やら書き込みやらでぼろぼろになった台本だ。他のことはともかく、こと演劇となると本気を出す。プロでいられる人っていうのは、やっぱりどこか違う。社会適応力は果てしなく低いけれど。

他の役者さんたちが揃うまで、部長の演技指導は続いた。

読み合わせを途中で抜け出して、足早に坂道を下る。残る練習日は、明日と明後日の二日だけ。まだ不安が残るけれど、何とかなるだろう。本当は、今日も最後まで残って練習をしておきたかったけれど。

足取りが、急に重くなった。先週の金曜日、高志に向けて放った言葉が思い出される。あのときの気持ちも、高志の惨めな姿も。でも、明後日には叔母さんが退院してくる。その前に、ある程度は家を掃除し

ておきたい。退院した叔母さんの苦勞が、少しでも減るように。

腕時計を見て、時間を計算する。スーパーに寄って、高志に食事を作って、家事を済ませて……。

どうやら今日も、帰りは遅くなってしまいそうだ。

手にした鍵を、鍵穴に差し込む。回すと、乾いた音がして鍵が開いた。鍵を抜いて、扉を開ける。冷蔵庫の稼働音が、小さく聞こえている。いつもと同じ、代わり映えのしない、高志しか暮らしていない家。こんなことになる前は、ほとんど足を運んだことがなかった。私の家に高志が来ることはあっても、だ。自分から遊びに来ようと思ったこともなかったし、誘われたこともなかった。

さて、と思う。どんな顔をして高志に逢ったら良いだろう。いままで通り、そっけなく対応すれば良いだろうか。それとも、この間のように厳しく向き合うべきだろうか。自分では決められないまま、玄関に上がっていた。買い物袋をそこに置いて、階段を上がる。きつと高志はベッドの中にいるだろう。起こしさえすれば、顔を見なくても済む。そもそも私は、通子叔母さんの苦勞を減らすために、こうして高志の面倒を見ているのだ。だから、別にアイツをどうこうしなくても何も問題はないはずで――

すると、引き戸を開く。いつもなら薄暗いはずの部屋は、カーテンが開け放たれていた。朱色の夕陽が差し込んで、ほんの少し目が眩んだ。

「……高志？」

「気まずさを堪えて、名前を呼ぶ。起きているのだろうか。——ベッドの上にはいない。部屋の中を見回す。机の前にもいない。もう一度名前を呼んで、一步部屋に踏み込んだ。ぐるりと周囲を見回す。

入り口からでは死角になる場所。部屋の隅に、高志は座り込んでいた。だらしなく足を伸ばして、首を垂らして。打ちひしがれた人がそうするように、体の力を全て抜いて。

だから、すぐには気づかなかつた。高志の右手に握られていた物に。左手を伝って流れているものにも。一気に、頭に血が上った。

「バカ！」

自分でも驚くほどの大声を上げて、高志の下に屈み込む。左手を——深く横に切られた左の手首の、その少し上をしっかりと押さえる。

「バカじゃないの！？ 何でこんなことしてんのよ！」

頭の中は真っ白で、とにかく流れ続けているこの赤いものを止めなくちゃいけないと、そのことだけで必死だった。

「ねえ、返事しなさいよ！」

震える声で、意識を確かめる。目の前がにじんで、高志の顔が見えない。こんなにも部屋は明るいのに。夕陽はあんなにも綺麗だったのに。

「俺は、ダメだなあ……」

久し振りに聞いた高志の声は、薄く、弱くて、隙間風のようなだった。

「頑張っても頑張っても、無駄にしちゃうんだもんなあ……」

「うるさい！ 黙りなさい！」

止まらない。どうしても止まらない。手で押さえてるだけじゃダメなんだ。ハンカチ……ポケットから出して、縛ろう。傷口を心臓より高くして、脇の下を押さえて……。

「嘘をつきたくなかっただけなんだけど、上手いかなかったなあ……」

ブラウスの袖で、目元を擦る。掌についた液体が、異常に熱い。

「救急車、すぐ呼ぶから……」

鞆、は……階段の下だ。この部屋には電話はないし、取りに行くしかない。立ち上がろうとすると、腕をつかまれた。

「こんなことで、死ねるはずないんだよ。分かってるんだ。でも、どうしても……」

「血が止まらないの！ 止まらないんだってば！」

「良いんだ。聞いて」

弱々しい声で、今にも意識を失いそうな目で、私を足止めする。もう一度、目元を擦った。

「後で聞くから。ちゃんと聞くから。だから死なないで……」

もう立ち上がることも出来なかった。足に力が入らない。顔も上げられない。いつかの、子供の頃のよ

うに、高志の腰に抱きついて、ただ泣くことしか出来なかった。

「受け持ってたクラスの子が、死んだんだ。自殺したんだ。いじめられてたって、遺書まで書いてた。僕は知らなかった。他の先生たちは、みんな知ってたんだ。でも、誰も何もしなかった」

高志の心臓は、ちゃんと動いている。ゆっくりだけれど、ちゃんと動いている。

「僕は、しかるべき方法で公表しようとしたんだ。でも、みんなが反対した。その子の両親まで反対した。みんなで口をつぐんで、なかったことにしようとしてたんだ」

高志の右腕が、私の背中に回る。強くなく、弱くなく、ただ優しさだけが感じられるような、そんな抱擁。

「僕はひとりでも、何とか公表しようとした。そしたら、いじめていた方の生徒の親が、僕に言ったんだ。『いくら払えば良いですか』って」

高志の言っていることが、全然頭に入っていない。分からない。抱きしめられた温かさが、鼓動を続ける心音が、途切れないようにと願っていた。

「教師も親も、子供のお手本になるべきなのに……どうして、みんな自分のことばかりなんだろう。都合の悪いことは見なかったことにして、忘れて、それでまたいつか同じことをするんだ。それが悪いことだって知ってるはずなのに、何度も、何度も……」

「もう良いから……！ 病院行こうよ！」

顔を上げた私を見下ろす高志の顔は、幸せそうに微笑んでいた。

「僕も、同じことを繰り返すんだ。自分のことばかりで、助けを求める声に気づかないで、後になって騒いで……でも、それじゃ遅いから、だから……」

「お兄ちゃん！」

無意識に叫んだのは、あの頃の呼び方。今の私たちと同じ距離でいられた、子供の頃の呼び方。自分でも、どうしてそう呼んだのか分からなかった。分らないまま、声を上げる。

「お兄ちゃんはずっと私を助けてくれたのに！　ずっとお兄ちゃんみたいになりたかったのに！　私は、お兄ちゃんを助けたいのに！」

小さい頃、泣き虫だった私。いつも慰められていた。高志は優しく頭を撫でながら、私にたくさんの言葉をくれた。傷つかないように、自分を守るように。そしていつか、その言葉で誰かを守るように。

「だからお兄ちゃん、死なないでよ……！」

顔を、高志の胸に押し付ける。洩れる嗚咽を押し込むように、注ぎ込むようにして、押し掛かる。

たかさんの言葉をもたらたはずだ。慰めの言葉も、勇気づける言葉も、元氣を出すための言葉も。でも、そんな言葉の全部をどこかに置き忘れてしまったみたいに、私の頭は空っぽで。泣きながら、気持ち言葉を葉に変えるしかない。

「私を守るから！　今度はお兄ちゃんを、私が守ってあげるから！　何度でも守るから！」

だから、死なないで。

「千代、守るってことは、そんなに簡単なことじゃないんだよ。それに、守るのが良いことだとは限らないんだ。傷つかないと分らないことだって、あるんだよ」

「やだやだやだ！ 痛い思いなんてしないで！ 何もなくても良いから、生きててよ！」

高志が溜め息を吐く。それから、私の背中を二回、優しく叩いた。

「血、止まったよ。もう大丈夫だから」

「え……？」

「千代のお陰だよ。ありがとう」

そう言つて頭を撫でてくれる掌は——大きくてたくましい、男の人の掌だった。

中学校の頃。高志がこの町に帰ってきた頃のこと。高志は、私の自慢のお兄ちゃんだった。先生になつて忙しいはずなのに、時々は家にも来てくれた。大人っぽい顔つきになって、雰囲気も変わった私のお兄ちゃん。少しでも意識して欲しくて、自分を変えようと思った。化粧を覚えて、運動をして、勉強を頑張つて、服装に気を遣つて。下着まで全部買い換えたりした。

それなのに、お兄ちゃんは部屋から出て来てはくれなかった。私の話を聞いてはくれなかった。

料理を覚えて、家事を覚えて、もっともつと勉強をして——気がつけば、私は変わっていた。いじめら

れることもなくなつたし、自分を守る方法も身につけていた。

でも、それでも――

本当は、高志お兄ちゃんに、守ってもらいたかった。赦されるなら、ずっと――

傷口を消毒して、軟膏を塗って、ガーゼを当てて、包帯を巻く。手当てをしている間、二人とも無言だった。冷静になって考えてみれば、手首を切ったくらいでは死ぬことはないのだ。手首には筋があるのだから、そうそう深く切れるはずもない。

「ありがとう、千代」

救急箱の蓋を閉めると、高志がそう言った。低く沁み込む、眠気を誘うくらい穏やかな声で。

「バカじゃないの」

私は顔を伏せて、そう言い返すだけで精一杯だった。気を緩めたらまた泣いてしまいそうだったから。

「でも、もう大丈夫だから」

「知らないわよ」

うつむいたまま私の頭に、また掌が乗せられる。ゆっくり、ゆっくりと、頭の形を記憶するように、掌が往復する。

「ご飯、食べたいな」

「……すぐ作る」

救急箱を持って立ち上がる。そういえば、買い物袋を玄関に置きっぱなしだった。買ってきた材料を頭の中で整理して、何を作るかを考える。

「レバー、食べられるようになったの？」

「随分前にね」

「じゃあ、レバニラ炒め作る」

私の背中に、高志の声が届いた。

「ひげ剃って待ってるよ」

家に電話をして、夕食はいらないと伝えた。二人で、居間のテーブルで、夕食を食べた。会話はそれほど弾まなかったけれど、ご飯は美味しかった。顔を上げると、高志の顔が見える。二人とも随分と変わってしまったけれど、何だか懐かしい感じがした。何より、嬉しかった。

「本当に病院行かなくて良いの？」

「大丈夫だよ。もうそれほど痛くないしね」

私を安心させるための強がりなのは分かっていたけれど、追求はしなかった。男の人は、いつだってやせ我慢をする。きっとそれを受け入れるのも、女の役目なのだろう。そんなことを思った。

一通りのことを済ませて、帰り支度。玄関で、靴に足を滑り込ませる。

「本当に送らなくて良い？」

「大丈夫。もう子供じゃないんだから」

笑顔で返す。笑顔が返ってくる。手を振って、「おやすみ」の挨拶。

玄関を出て、扉を閉めて、深呼吸をする。また少し目の周りが重いけれど、お風呂に入れば治るだろう。

時間も遅いし、早く帰らないと。

でも、私の足取りは、とてもゆつくりとしたものだった。

文化祭まで、残り二日。午後の授業は中止になって、どこの部活もクラスも、準備にかかりきりになっている。もちろん、私たち演劇部も。

一度台本の読み合わせをして、最終確認。今日以降、変更はしない。本番のアドリブは別として。そこで、私は部長にひとつの提案をした。

「うん、まあ、良いんじゃない」

私の提案は、思っていたより簡単に通った。全員が台本にペンを走らせて、修正をする。

「じゃあ、立ち稽古をしましょう」

みんな揃って部室を出る。これから夕方まで、体育館で繰り返し稽古が行われる。外廊下を歩いている

ときに、部長が話しかけてきた。

「お千代も、役をモノにしたね。どんな心境の変化？」

この人は本当にそういうところは目ざとい。でも、深くは追求しないのも良いところだ。

「別に、大したことじゃないですよ。ただ、お姫様が本当に欲しかったものが何となく分かっただけで」

私がそう言うと、部長は気のなさそうな返事をして、少し考えた。

「私は、ただの喜劇がやりたかったんだけどね。お千代のお姫様も、高校生の文化祭っぽくて良いと思うよ」

言い方は雑だけれど、これは部長なりの褒め言葉なのだと分かる。

「来年、よろしくね」

「その前に、明後日の本番ですけどね」

微笑み合って、体育館に足を踏み入れる。このとき初めて、舞台上立つのが待ち遠しいと感じたのだ。た。

雑に散らした髪の毛が、吹く風に乱される。前髪をかき上げると、夕陽が真っ直ぐ目に入ってきた。学校からの帰り道は、風の通り道。道の両脇に立ち並んだ木々も、そろそろ葉の色を変えようとしている。

下り坂を小走りに、家路を急ぐ。体ははたたくたに疲れているけれど、気にはならない。今日もアイツの

家に行つて、ご飯を作ろう。約束はしていないから、驚いて、それから喜んでくれると思う。そう考えただけで、気分が軽い。私にしては、らしくないほどに。

団地の中を進んで、昨日も来た家の前に立つ。昨日までとは違う気持ちで、鍵を開ける。出来るだけ音を立でないように階段を上がつて、そつと部屋の引き戸を開ける。

「……あれ？」

窓が開けられている部屋。綺麗に片付けられた部屋。布団はベッドの上にきちんと畳まれている。でも、誰もいなかった。昨日とは違う。本当に無人だ。どこかに出掛けているのだろうか？

まあ良いかと思ひ直して、とりあえず家事を済ませてしまおうと階段を降りる。階段の真ん中に差し掛かったところで、玄関が開いた。

「千代、来てたのか」

「あ、うん。おかえり……」

高志が、帰ってきた。髪の毛を切り、スーツ姿で、脇に鞆を抱えた姿で。

「えつと、その格好は何？」

思わず別人と見間違ふほど、しつかりとした格好。顔色だけが青白いけれど、表情から弱さは見えない。

「色々回ってきた。今まで休んだ分、これからやらなきゃならないことは多いからね」

革靴を脱いで、下駄箱にしまつて、玄関に上がってきた。私は階段を全部降りて、高志と向かい合う。

向かい合って初めて気づいた。高志は、こんなにも背が伸びていたんだ。

「お風呂、入りたいな。それから、ご飯を食べながら話でもしよう。話したいことが、たくさんあるから」
そう言っ、私の頭に一度手を置いて、ネクタイを緩めながら階段を上がって行った。その背中を、呆然と見送る。

「……何か、格好が違くと別人みたい」

思ったままのことを言うと、高志は足を止めて振り返って、微笑んだ。憎たらしい笑顔だった。

「外面は良いんだよ。これでも元教師なんでね」

分かった。私の性格が少し歪なのは、絶対コイツのせいだ。

日が暮れると、虫の鳴く音が聞こえて来る。時々聞こえて来る話し声は、近所の人たちのものだろうか。
夕食時の、穏やかな空気が辺りからも感じられる。

「昨夜、大学時代の友達に電話したんだ。それで、塾講師の仕事を紹介してもらったよ。面接も問題なく終わったし、来週から働かせてもらえることになった」

「へえ」

「今朝一番で床屋に行って、一応医者にも行った。お風呂場のドアにひっかかたって嘘ついてね。それから面接を受けて、友達とゆっくり昼を取って、夕方まで母さんのところにいたんだ」

「ふーん」

「……話、聞いてるか？」

「うん」

何というか、腹立たしかったりするのだ。私があれば泣いて叫んだのに、高志は気にも留めず、あっさり社会復帰を果たしている。それに、今気づいたのだけれど、高志が引き籠もらなくなったら私がここに来る理由もないのではないだろうか。もつとも、明日には通子叔母さんが退院するのだけれど。

「焼き茄子、ちゃんと食べてね」

「ああ、うん。大丈夫。食べるよ」

複雑な顔をして、高志が苦手な茄子に手を伸ばす。私は黙々と箸を動かしていたおかげで、今は食後のお茶を飲んでいる最中だ。

「明日は母さんを迎えに行つて来るよ。荷物持ちが必要だろうから」

「へえ」

「そういえば、トイレトペーパーの買い置きが終わってたな。シャンプーとかも、もうすぐ終わりそう
だ」

「ふーん」

「……千代、怒ってないか？」

「うん」

私の淡白な対応に、さすがの高志も少しひるんだみたいだった。それでも頑張って話しかけてこようとしている。律儀な男だ。

「料理、上手なんだな。何食べても旨いよ」

今更何を言っているのか。この男は。半年間、毎週食べさせてあげていたというのに。言うのが半年遅いというのだ。

「えーと……ごめんな？」

「それは、何に対して謝ってるの？」

三年近くも引き籠もっていたことだろうか。それとも、昨夜のバカな行動に対してだろうか。もしくは、ここ半年の私に対する失礼な対応に関してだろうか。

「良い男になれなくてさ」

「……はあ？」

思わず声が裏返ってしまった。高志が箸を置いて、真っ直ぐに私を見つめている。

「もっと良い男になって、頑張つて、千代を傷つける全部から守りたかったんだけど、そんな必要もなくなつたみたいだし」

言いたいことの意味が良く分からないので、黙っていることにした。

「教師になったのだって、最初はそういう理由だった。でも、結局ダメだったし。それでも辞めずに続けてれば、同じ失敗だけはしなかったかもしれないのにな」

「過ぎたことは、もう良いんじゃないの？」

「そうかもしれないけど、そうじゃないかもしれないだろう？ 昨夜のことだってそうだ。自棄になってあんなことして、でも、分かったことがあった」

左手首に巻かれた包帯を、右手の指でなぞりながら、高志が言う。

「痛いときは、助けてくれる人がいるってこと」

「別に助けた訳じゃないし、アンタが痛いなんて知らないわよ」

バカらしくなってきた。要するに、高志はひとりで懺悔をしたいだけなのだ。私は牧師じゃないから、そんな告白は聞いていられない。それに、私だって高志には謝らなくてはならないことがあるのだから。こういうのは、お互い様なのだ。

「でも、千代がいた。誰かがいてくれるってのは、心強いよな」

照れくさそうに笑う高志の顔を、まともに見られない。

話題を変えようと、私は頭を巡らせる。今日あったこと。明日あること。その先にあることを考える。

「あのさ、今度の土日が文化祭なんだけど、来る？」

割り当てられたチケットは、まだ余っているから。

お姫様は、自分を奪い合って争う六人の王子たちに、それぞれ質問を投げかける。最後の質問は、自分の夫となった後、どういう風に振舞うのか。王子はそれぞれに答え、姫はそれぞれにダメ出しをする。途中で王子たちは小競り合いを始めるが、姫の前で剣を抜く訳にはいかない。なので、それぞれが頭を捻って決闘の方法を決める。出来るだけ暴力的でなく、かつ自分の良い部分がアピール出来るような決闘方法。

それに勝ち残った最後のひとりに、お姫様が問う。貴方は、どんな妻を望むのか。

王子は、ただ在るがままにいて欲しいと答えたが、姫はその王子すらも選ぼうとしなかった。

「私は今在るがままではなく、自分を誇れるように生きたい」

選ばれなかった六人の王子は、落胆したままそれぞれの国へと帰ることになる。

そして、話のオチは――

まあ、笑えるだけなので良いだろう。

舞台を見終わった高志は、笑い切れない笑顔で私に向かってこう言った。

「お姫様は、強いんだな」

そう。英雄なんていなくても、女の子はひとりで生きていけるのだ。

「少しは見直した？」

悪意に涙していた頃の私とは、もう違う。私は、変わったのだから。

「降参」

そう両手を力なく上げた高志の背中を、私は力いっぱい叩く。

「ほら、まだ時間あるんだから。何か奢ってよ」

今日は文化祭。いつもは息苦しく感じる学校も、今日だけは浮かれっぱなしの軽い空気が漂っている。

カラフルで、騒々しくて、色々な音楽の聴こえる学校。

私たちは人ごみの中を、はぐれないようにして並んで歩く。

「あ、お千代！ 劇面白かったぜ！」

「お千代ー！ その服似合ってるねーぞー！」

すれ違う男友達の声に、適当に答えながら。

「なあ千代、せめて着替えてからにしないか？ 目立って仕方ないだろ」

舞台が終わってすぐだったので、私は着替えていない。ひらひらの、幅を取るスカート。肩口が大きく開いたドレス。小物はさすがに置いてきたけれど、この服を脱ぐのは結構面倒なのだ。

「明日も舞台はあるんだから、宣伝しなきゃね」

来年は、私が部長。明日の舞台は、伊藤部長の最後の仕事。せめて華を持たせたい。

みんなは知らない。このお姫様がどんなことを考えて、思って、六人もの王子たちを袖にしたのか。で

も、それで良い。気づいてくれなくても構わない。

「明日も、ちゃんと見に来なさいよね？」

後ろを振り向いてそう言うと、高志は少し驚いた顔をして、しっかりと微笑み返してくれた。

これは後日談になるのだけれど――

文化祭で大盛況だったおかげで、私たち演劇部員は一躍有名人になった。

そして、そのせいで私は似合わないあだ名で呼ばれることになってしまったのだった。

了